

インドで漢訳された聖書 マーシュマン、ラサル訳『聖經』

図書館長 国際コミュニケーション学部教授 塩山 正純

16世紀後半にカトリック宣教師が東アジアで活動を始めて以来、とくに中国ではヨーロッパ人宣教師の活動が継続的に行われた。19世紀になるとイギリス、アメリカの東アジア進出の拡大に伴い、プロテスタント宣教師の来訪も活発になり、カトリックの宣教師が基本的には行わなかった聖書の漢訳も自らの重要なミッションとして積極的に取り組んだ。

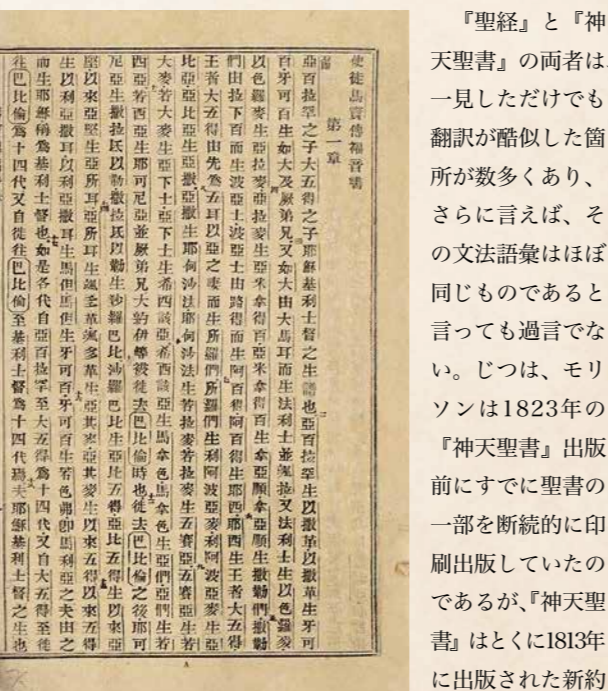
中国本土で聖書全文を初めて漢訳したのは、イギリス人のプロテスタント宣教師モリソン（Robert Morrison, 1782-1834）である。モリソンはプロテスタントによる最初の渡華宣教師として、1807年に当時まだキリスト教を禁じていた中国に到着した。渡華の主な目的は聖書の漢訳であった。モリソンは出発前のロンドンで現地在住の広東人から中国語を学び、パリ外国宣教会の宣教師ジャン・バセ（Jean Basset, 1662-1707）による新約聖書の抄訳で大英博物館所蔵の『四史攸編』を写して中国に持参し、それを参照しながら、1810年に「使徒行伝」の漢訳を皮切りに、1813年には新約聖書の漢訳『新遺詔書』、そして1823年には旧新約聖書全文の漢訳である『神天聖書』を刊行した。

モリソンが中国本土で聖書を漢訳したのと同時期、インドでも聖書の漢訳が行われていた。17世紀に東南アジアへの進出に出遅れたイギリスは、インドに貿易の活路を見出して、英国東インド会社が1690年にコルカタ（Calcutta, カルカッタ）の町を建設し、モリソンが中国本土で活躍した当時、すでにコルカタはインド植民地支配の重要な拠点となっていた。デンマークによるドイツ人宣教師の派遣がプロテスタントのインド伝道の嚆矢であるが、その約90年後の1793年には最初の英国人インド宣教師ケアリー（William Carey, 1761-1834）らがコルカタで活動を始めた。当時、東インド会社がヒन्दゥ教徒やイスラム教徒との摩擦を嫌ったために、1799年に伝道の拠点がコルカタの北約22キロのセランポールに移され、ケアリー、ウォード（William Ward, 1764-1823）、マーシュマン（Joshua Marshman, 1768-1837）の三人を中心に宣教活動が行われ、マーシュマンの聖書漢訳もこのセランポールで行われた。ちなみに、ケアリーのインドでの活躍が1804年のロンドン伝道会（London Missionary Society）の設立につながり、中国で活躍したモリソンも同会から1807年に中国に派遣されている。

モリソンが聖書の翻訳を開始したのは、彼がプロテスタント初の宣教師として広州に到着した1807年以降のことであるが、マーシュマンはそれより1年前の1806年から、マカオ生まれでインド在住のアルメニア人ラサル（Johannes Lassar, 1781-1835?）から中国語を学びはじめた。マーシュ

マン、ラサルは1810年に、マタイの福音書とマルコの福音書の漢訳を完成し、さらに1813年にはヨハネの福音書と使徒ヨハネの書簡を漢訳し、1816年には新約聖書の漢訳を完成した。そして、1822年に二人は旧新約聖書全文の漢訳本を刊行したが、所謂『聖經』と称されその新約部分は、本学名古屋図書館も所蔵している（[The New Testament] / [Lassar and Marshman][Serampore] [1822]1冊; 28cm請求記号：193.5:L33）。

中国本土と、はるか遠く離れたインドの両地で、同時期に聖書漢訳の競作があったわけだが、マーシュマン、ラサルがインドで漢訳した『聖經』は1822年、一方、モリソンの『神天聖書』はその翌年の1823年に刊行されており、『聖經』が『神天聖書』より1年早く聖書全文の漢訳を公のものにしたことになる。それ以前から、マーシュマン、ラサルによる漢訳が着々と進捗しているという情報を耳にして、同様に漢訳に取り組んでいたモリソンの心境は穏やかではなかったとも言われる。モリソンがロンドン伝道会に宛てた書簡（Letter to LMS Dec. 18th）にも、当時、セランポールと中国の宣教師の間で聖書漢訳の先陣争いがあったことを示唆する記述があり、お互いをライバル視していたことが見て取れるのである。漢訳のプロセスにおいて、お互いの漢訳を目にする機会もあったようで、マーシュマンのそれを目にしたモリソンは、中国から遠く離れたインドで活動するマーシュマンらの漢訳には、中国人（中国語）の世界観を十分に理解していないが故の誤りがあり不適切であると評価し、自身はより一層完全な中国語聖書の完成を目指したようである。漢訳の草稿段階でマーシュマンが実際にどのような中国語を使ったかについては定かではないが、モリソンの書簡から見る限りでは、マーシュマンの中国語のレベルにモリソンがかなりの不満を持っていたであろうことが推測できる。



「マーシュマン、ラサル訳『聖經』マタイの福音書の冒頭」

『聖經』と『神天聖書』の両者は、一見しただけでも翻訳が酷似した箇所が数多くあり、さらに言えば、その文法語彙はほぼ同じものであると言っても過言でない。じつは、モリソンは1823年の『神天聖書』出版前にすでに聖書の一部を断続的に印刷出版していたのであるが、『神天聖書』はとくに1813年に出版された新約聖書の漢訳『新遺

詔書』をほぼ踏襲している。モリソンとマーシュマンがともに参考にした『四史攸編』とあわせて、『聖經』、『神天聖書』の「マタイの福音書」第2章第1節を比較してみると、『聖經』と『新遺詔書』の人名と地名の音訳語が一致している一方で、『四史攸編』は全く別の当て字が使われていることが分かる。つまり、『聖經』と『新遺詔書』にある人名、地名の翻訳語は『四史攸編』によるものではないということが明白である。

【四】耶穌既生于如達白冷黑洛特王時即有數瑪日自東方來柔撒冷

【聖】夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後於希羅得王之時卻有哲人從東方來至耶路撒冷

【神】夫耶穌生於如氏亞之畢利恆後至王希羅得之時卻有或嗎啞自東邊來至耶路撒冷

当時のイギリス国内ではモリソンの名声が勝っていたため、モリソンの漢訳をマーシュマンが踏襲したという説が有力で、モリソンの漢訳の協力者である宣教師ミルン（William Milne, 1785-1822）も「マーシュマンの訳本は、明らかにモリソンの訳本から写した」との見解を持っていた。マーシュマンに中国滞在の経験が無かったことから、彼の中国語の能力に疑問を持つ向きも多かったのである。一方で、マーシュマンには孔子の著作の翻訳や中国語文法書『中国言法』等の著作もあり、中国語の能力は優れていたとする説もある。

では『聖經』と『新遺詔書』に登場する人名、地名はなぜこれほどまでに一致したのか。これについては、朱鳳氏の2013年の論考がモリソンの書簡からその答えの可能性を見出している。モリソンはかねてより聖書漢訳で使用する用語の統一を目論んでおり、1811年にロンドン伝道会に宛てた2通の書簡でも言及している。1通目の3月の書簡では「中国語には同音異字がたくさん存在している。聖書或いは宗教専門書によく使われている聖書固有名詞に関して、統一した漢字名を使用する必要がある。でなければ、大きな混乱を招くかもしれない。例えば同じ名前を与えつつも、読者が違うように思うケースもある。『IaiahとEsaias』（イザヤ）は同一人物を表しているが、翻訳した中国語の発音は同じであっても、当て字は違ってくる。このようなことを防ぐために、私は今Dictionary of Scripture Names（聖書固有名詞字書）を作成している」と述べている。そして2通目の11月の書簡では「中国語に翻訳される聖書或いは宗教関連出版物にあるすべての人名と固有名詞に使用された漢字の統一性を守るために、私は聖書固有名詞字書を編集した」と記している。

また、モリソンはロンドン伝道会への別の書簡で「マーシュマンから二度に渡って私に紙、中国語書物と中国語教師を送るようにと依頼してきた。私も二回ほど彼に紙と本を送った。そして最近教師も送った」とも述べている。つまり、マーシュマンは度々モリソンに紙、中国語書物と中国語教師を送るように要請するなど、中国語の習得に関する様々な援助を求め、モリソンもマーシュマンにできる限りの支援を提

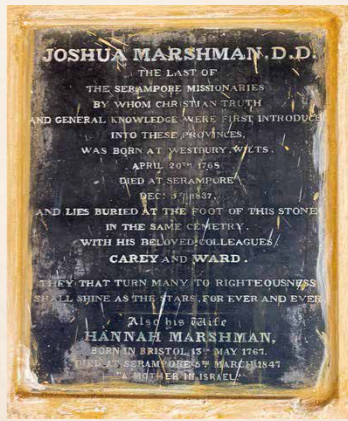
供していたのである。

目下、モリソンの出版物と判明しているものに「Dictionary of Scripture Names（聖書固有名詞字書）」という名称のものが無く、その存在の確かさについては今後の研究を待たねばならないが、マーシュマンとモリソンの漢訳聖書に使われている固有名詞がほぼ同じであり、漢訳聖書用語統一にかけるモリソンの決意の強さからみて、用語の統一に関してモリソンが手がけた何らかの資料がセランポールのマーシュマンにも共有されていたと考えるのが自然であろう。

いずれにしても、今から約200年前の19世紀初頭の同じ時期に中国本土と、遠く離れたインドで聖書漢訳の競作があったことは、歴史の事実として非常に興味深い。マーシュマン、ラサルの『聖經』は、本学図書館が原書を所蔵するほか、愛知大学貴重資料デジタルギャラリーにも「新約聖書 初版」として収められており、『神天聖書』、『新遺詔書』、『新訳全書』（北京官話訳 新訳聖書）、『新遺詔聖経 初版』（ロシア正教会訳聖書）などとともに全編のデータが完全な状態で公開されている。また、1806年からマーシュマンに中国語を教え、ともに旧新約聖書の全文を漢訳したラサルは、それ以前にすでに独自の漢訳も行っており、1807年にマタイの福音書の漢訳稿本『嘉音遵囑嘆菩薩之語』を完成している。同資料は愛知大学国研叢書として影印・翻字資料が刊行されており、デジタルギャラリーや影印・翻字資料で各聖書の漢訳の語彙や文体の違いにも注目してみると面白い発見があるかも知れない。



セランポール 教会正面
「Serampore John Nagar Baptist Church マーシュマンの活動拠点」



「セランポールの宣教師墓地 マーシュマンの墓標」
参考文献
朱鳳（2013）「モリソンの書簡についての研究」『或問』24号所収
永井崇弘・塩山正純（2021）『ラサル訳『嘉音遵囑嘆菩薩之語』—研究と影印・翻刻—あるむ塩山正純（2013）『初期中国語訳聖書の系譜に関する研究』白帝社